

## 第30回日本気象学会夏期特別セミナー (気象若手夏の学校) 開催報告

第30回日本気象学会夏の学校実行委員会  
(関庚夕\*1・今井隆翔\*2ほか)

### 1. はじめに

第30回気象学会夏期特別セミナー(以後、夏の学校とします)が、2018年8月31日(金)から同年9月2日(日)まで二泊三日の日程で、愛知県新城市にある愛知県民の森において、名古屋大学の宇宙地球環境研究所(環境学研究科地球環境科学専攻及び理学部地球惑星科学科所属の学生、計11名)が主幹となって開催されました。今回は日本全国から84名の方々にご参加していただきました。参加者は学部生26名、修士課程51名、博士課程5名、社会人2名でした。

一般講演は昨年度、第29回夏の学校で良い評判だった参加者全員による口頭発表を採用しました(第29回日本気象学会夏の学校実行委員会 2017)。また、夜にはレクリエーション及び懇親会が開催され、参加者の交流の場になりました(第1図)。今回の夏の学校に関する詳しい内容はWebページを参考にしてください(<https://sites.google.com/view/meteorologytugaku2018nagoya> 2018.10.16閲覧)。

(関庚夕)

### 2. 招待講演

大学で研究されている方2名と民間で活動されている方1名を講師としてお招きし、1日目と3日目に各1時間程度ご講演いただきました。講演内容は以下の通りです。

増永浩彦氏(名古屋大学宇宙地球環境研究所准教授)  
「井の中の蛙大海を知らず…されど蛙大海で生きるに能わず」

増永准教授には、4年余りの米国での研究生活と5か月間のフランス滞在の経験から、海外で暮らし働くことの意義や楽しさをお話いただきました。私たちが知らない米国やフランスの風景やそこに住む人々の性格などについても教えていただき、今後海外に行きたい参加者はもちろん、海外に興味のなかった参加者にとっても有益なお話となりました。

吉野 純氏(岐阜大学大学院工学研究科准教授;工学部附属応用気象研究センター長)

「理学と工学の融合による気象情報工学」

吉野准教授は、学生時代に培った理学的マインドセットの下で基礎研究を進めつつも、新たな人的交流を通じて得た工学的マインドセットの下で応用研究を行っていらっしゃいます。本講演では、台風に関する理工学的な研究例を紹介しつつ、気象業務に関連した応用研究についても紹介していただきました。



第1図 集合写真(2日目)。

\*1 (連絡責任著者) Kyeong-Seok MIN, 名古屋大学環境学研究科。

〒464-8601 愛知県名古屋市千種区不老町。  
meteorologyss2018@gmail.com

\*2 Ryusho IMAI, 名古屋大学環境学研究科。

© 2018 日本気象学会

岡田桂子氏（気象予報士；日本 IBM The Weather Company 勤務）

「届け、気象情報！ある気象予報士の目から見たリアル」

岡田氏には、気象予報士になりたての頃に片頭痛持ちの方のために考案・開発に携わったアプリ「頭痛ーる」の開発秘話や、あらゆる業界から期待されている気象ビッグデータを利用したサービスについてお話いただきました。アプリ開発秘話からは、気象に携わるものとして片頭痛持ちの方に役立ちたいという熱い思いが伝わりました。

（今井隆翔）

### 3. 一般講演

今年度の夏の学校の一般講演は、参加者全員が口頭発表を行う形式を採用しました。これは昨年度開催された第29回夏の学校にて高評価を得た形式で、今回の企画もこの第29回で行われた一般講演を参考にしました。一般講演は日本全国で気象学の勉強をしている学生及び若い研究者の交流を目的としています。参加者全員が自身の研究内容や気象に興味を持った理由について、学会形式で発表を行いました。

発表は12のセッションに分け、3つの会場を利用して行われました（第1表）。

気象学会大会と同じく会場間は移動可能なため、興味のある発表を自由に選んで聴講していただきました。発表時間は、5・10・15分の中から選択できるようにしました。その際に研究分野や興味の対象となるカテゴリを選択してもらい、発表セッションに分類する際の参考にしました。発表時には司会・進行役として各セッションに座長を配置し、その補助として名古屋大学を含む東海圏の大学の学生の方に会場スタッフとして活動していただきました。第2図に、一般講演の様子を示します。

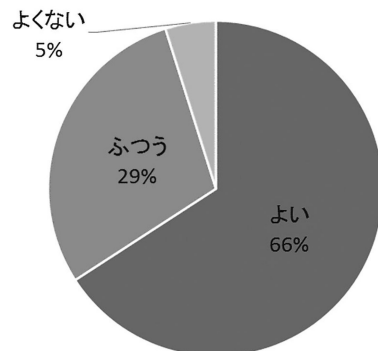
一般講演終了後には、最も良いと感じた発表を選んで投票していただきました。この結果は2日目夜のレクリエーションにて発表し、優秀発表者として3名を表彰しました。参加者全員発表を行うことで発表者のことを多くの方に知ってもらうことができ、そのあとの円滑な交流に繋がりました。

第1表 一般講演タイムテーブル。

時間	A 会場 (降水システム)	B 会場	C 会場
AM1 09:00-10:30	メソ気象・局地気候 I (7名)	気候システム I (6名)	大気力学 (大規模波動, 対流・波動) (7名)
AM2 10:45-12:15	メソ気象・局地気候 II (7名)	気候システム II, 大気力学 (総観規模, 惑星大気) (6名)	物質循環 (8名)
PM1 14:00-15:30	メソ気象・局地気候 III, 積雲対流 (7名)	熱帯気象 (大規模気象), 中層大気 (7名)	中高緯度大気, 気象教育, 大気放射 (6名)
PM2 15:45-17:15	雲物理・雪水 (8名)	熱帯気象 (台風, リモートセンシング) (9名)	気象予報, 環境気象・大気境界層 (7名)



第2図 一般講演の様子。



第3図 一般講演アンケートの結果。

参加者全員発表の一般講演に対するアンケート結果の一部を第3図に示します（全参加者の約98%の方から匿名で回答をしていただきました）。「今年の一般講演の参加者全員発表はどうでしたか」という質問に対して、「よい」が66%となりました。また、「色々な話が聞けて学部生として非常に良い経験ができた」や「研究のモチベーションが高まった」などといった肯定的な意見を数多く頂きました。一方で、「全員の話を聞いてみたかった」という意見があるように、参加していないセッションの発表を聴講することができないという運営面での課題が残りました。2年連続となる参加者全員発表の一般講演となりましたが、両年度とも高評価を頂いたため、来年度の夏の学校における一般講演の形式を決める上で参考になると思われま

（今井隆翔）

#### 4. まとめ

夏の学校に参加していただいた講師、及び参加者の方々に、深く感謝申し上げます。また、第29回夏の学校実行委員会（主幹：京都大学、代表：吉岡大秋氏）には、運営に際し、様々な助言をいただきました。さらに、日本気象学会からは資金援助をしていただきました。皆様に深く感謝申し上げます。次回（2019年度）の第31回夏の学校は、筑波大学が主幹となり開催される予定です。実り多き夏の学校となることを願うとともに、来年度も学生・若手研究者間の交流が活発になることを期待しております。

（関庚夕）

#### 参考文献

第29回日本気象学会夏の学校実行委員会，2017：第29回日本気象学会夏期特別セミナー（気象若手夏の学校）開催報告。天気，64，835-837.